



牧水さん お久しぶり

池内 紀

ドイツ文学者



台座をいれると四メートルちがいが。幅は七〇センチたらず。全体がベージュをおびたグレーで、ハバナ葉巻の色に似ている。

若山牧水の歌はあちこちにあるが、これは沼津市中西山のもの。辺りを香台といつて、見晴らしがいい。

た牧水その人のうしろ姿とそっくりである。

「香貫山」の歌は大正九(一九二〇)年の作。沼津に移ってきてすぐのころで、散歩がわりにわが子と山に登ったのだらう。以来、沼津が彼の故郷になった。

と、もっとも早くに出た大地震の記録と報告ではあるまいか。東京の出版社・雑誌社が壊滅状態だった。新聞には「十月号休刊のお知らせ」が目白押し。

歌誌ではあれ「創作」十月号の歌は四頁のみ。あとは「震災地

と、もっとも早くに出た大地震の記録と報告ではあるまいか。東京の出版社・雑誌社が壊滅状態だった。新聞には「十月号休刊のお知らせ」が目白押し。

記録者の目で一貫して、私的な感情表現はひとこともまじえていない。ここから語らなくても、自然のたたずまいが天地の異常を正確に告げている。

今年、牧水没後七十五年にあたる。沼津市は町をあげて文学祭を企画し、第一回は牧水にあてた。永遠の青年のような歌びとが、久しぶりにもとって来る。

に上りあげ、できるだけ多くひろっておく。大いなる災難を、より正確に伝えるためだった。

牧水自身は「地震日記」を寄せている。九月一日当日、伊豆西海岸にいた。その瞬間の揺れぐあい、異様な音響、石垣の倒壊、海面一帯がかすかに泡立ち、つぎには急速に盛り上がり、さらにそのつぎ、漁船をのせたまま沖へ沖へと走ったこと。

カワガラスは私の好きな鳥のひとつだが、うれしいことに先日、上州の渓流で出会った。突然、ピッピッと鋭い鳴き声。ハッと足を止め、全身を耳にした。つづいてビニッビニッと、張りのある、すぐおぼった特有の音。黒い一点が目の前をかすめ、上流の岩にとまった。

牧水の歌が頭をかすめた。「みなかみ紀行」と名づけたように、いつも水に親しみ、川辺の鳥をよく見ていた。「なきすぎゆきぬ」であって、カワガラスは鳴きながら飛ぶ。その習性がきちんと歌いこんである。水中の岩のあいだの奔流は、まさしく「たぎち輝き」そのままだった。

いけうち・おさむ 40年生まれ。著書に『ゲーテさんこんばんは』(集英社)、『無口な友人』(みすず書房)、『二列目の人生』(晶文社)ほか。

香貫山いたゞきにきて香貫山にあそびさしくをねば富士はれにけり

私は昨年、『新編みなかみ紀行』(岩波文庫)をつくった。あらためて牧水の紀行文を読み直して、その新鮮さに舌を巻いた。おおかたが八十年ばかり前に発表されたもののなかに、少しも古びていないのだ。

あきらかに彼は歌と散文をきびしく区別していた。叙情は歌にゆだね、散文には入れない。かりに打ってつけの場に立ち会おうと、ことさらに乾いた報告にとどめた。近代的なルポルターージュの手法にもとづき、即物性と効果音が巧みにとり入れている。

編集・発行人の考え方がうかがわれる。見たこと、聞いたこと、確かめたことを、なるだけ多角的

今年、牧水没後七十五年にあたる。沼津市は町をあげて文学祭を企画し、第一回は牧水にあてた。永遠の青年のような歌びとが、久しぶりにもとって来る。

川、駿河湾が大きな弧をえがいている。緑の帯は千本松原だ。早朝、あるいは雲が切れると、まさしく「富士はれにけり」、どっしりとした愛蔵山のうしろに、スックと美しい三角錐のそく。

実をいうと、この歌碑はつい先だってまで、奥の繁みに隠れていた。あたりにゴミがちらばり、野良ネコが昼寝をしていた。

牧水愛する人たちが力を合わせ、碑を台地のはしまで歩かせた。多少とも背高ノッポをべつにすると、歩くのが好きで、そして気に入ったところに行んでい

牧水愛する人たちが力を合わせ、碑を台地のはしまで歩かせた。多少とも背高ノッポをべつにすると、歩くのが好きで、そして気に入ったところに行んでい

牧水の歌誌「創作」の大正十二年十月号は「大震火紀念號」と銘打っている。関東大震災のあ

牧水の歌誌「創作」の大正十二年十月号は「大震火紀念號」と銘打っている。関東大震災のあ

牧水の歌誌「創作」の大正十二年十月号は「大震火紀念號」と銘打っている。関東大震災のあ

牧水の歌誌「創作」の大正十二年十月号は「大震火紀念號」と銘打っている。関東大震災のあ

牧水の歌誌「創作」の大正十二年十月号は「大震火紀念號」と銘打っている。関東大震災のあ

牧水の歌誌「創作」の大正十二年十月号は「大震火紀念號」と銘打っている。関東大震災のあ

牧水の歌誌「創作」の大正十二年十月号は「大震火紀念號」と銘打っている。関東大震災のあ